



曉
基
句
集

下

中村俊定文庫
文庫 18
751
2



曉堂先生數句集下

秋之部



日くくしれと物しも物ぬ秋と来照
 常の海着くこれや今物乃秋
 出ろくと物り知りり 露のあき
 芝あれ葉拍子とえて今よの秋
 初秋やなましくて秋の静なる
 今よの秋死よすー人よあふ
 知多の浦一草草おやとりて

きよとよひし秋ととてこれに位の草

文抄よりあうりと可く

秋二日月となく風も吹くハ布く

士改盛喜はあうり時

うつさゝの現は秋とく日や卯

七夕

萩栝板星は傍る時をぬぬ

麻ひめれとく一はく 袋小袖

玉簪のまけり 逢草星の祢や

峠の由縁なき草女七夕

鹿島土も始とらるる此川

江よまゝく海へ新や銀海

戦よあよきなき心けり 逢

字少や玉簾の子も星むら

廿年あよのまつやけりと重

けり色や鳥と塔し身親みない

星あひやよのめりたる不二流波

七夕や世よ大よまさを事

そまゝく星小一帯の名をえり

かゝ色や心の友を伊勢小所

病をとくまゝくの上登けり系

星今言着みくも心人あゝ心

酒星あれど此上酒泉を〜んや

七夕や 帰る 帰る 帰る

雁の 群や 裂らすわ、終星

明〜んや 七夕のめ此園の雲

別を 早今を本隠ま〜んや

〜んを〜ん紙の箱に園を〜んて〜んきあれ宿〜ん

〜ん成るよ〜ん〜んか〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

思ひ出〜ん

り〜ん帆〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

星此 糖や 八日〜ん〜ん 白芙蓉

八月十日必〜ん

中將の君〜んを〜んせ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

ね〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

叶ま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

三乃月市に臨み人々非
 道りやなまを御の御座浦
 籠るる月よ世よされ夕の
 静さや何なま里れ高灯籠
 ほくくと見えさやう燈籠
 木のひき川うゆれをさる人々
 まろりまろり酒をてをやさるり
 屋敷へ流るる山田へふとやうなりんれ
 好の風三井の鐘よりさきおる
 秋の勢や光籠りのほの浦の山

満山秋の村き風さふとたれよ

秋の勢の吹りつけくもさる山
 葉よ舞の頻のいそきやあきの風
 あき風や暮お別れさるの勢
 秋のさや暮籠るる酒乃君
 静の空れ吟出まろり夜のの勢
 あき風や暮うひもさる市
 市よあつ綱の尾うれさあきの風
 井澤とてはより村のトきまはれ此あきの川を移きま
 とのこれまはれはあひし経念なるともなましく捨ひらる

人もあつとみさう評載てあやき田家もやと

枯垣のむすひめきれく秋の風

害中 切角と野分 逢ぬ 旅路に

左中於城破まゝ洪鐘は金ヶ崎の海に沈くと云傳是ハ

鐘を多うい浪をうれと秋の聲

本音さ輝 水ハ日の西ニ 落 舟をあきれたる名

流谷急流 弾も八洞とめうて入る三平餘所 重音此中と

たうとくめ捕戎う三男店を希入る 禮正保刺よむうて

風多清音よ終るととれ家のい

雲 起 寺つと野 秋の聲

指書 証の証よりれつるはむゆ之印

露 酒をき人の痛うはや春の露

形名亡人斗極と暮己

さよとくれい 暮路くのら露と可也

砂子の樹は低小かりほくそ身をかきぬ何所れ家とと元の

ゆへにさあえおまは引をきて又事のあわさひすん

人にかさくま居す急重しきうかすやそを詠なくうい

邪もむ智語なく我等となもれしてせそすハされハ柱の柱

つとあまもあまわさう 秋のまを伝系あまもあまのあまのま

やすれうとれい 色よ思ひ境くそまをくまをれうとんう

まよふを家聖ハ 居れき 露のされ
本様 くの 露す 名れし しくやを 本様

日の 照や 一面 露の くれ しくや

春の 山 野人 坊や 花 本 様

二日 咲 本 様 くらうて あさき

白 本 様 糸 瓜 中 二 咲 くらう

若柳 柳 くらや けし 夕れ 日の よろり

信濃の 是より 甲斐の さふ入

川 風 の う けうと けうと くらう

女房を 林、 勢と うつきく 女房を

まよれし 一 あやうき 春の 歌 くれ

何 柳 園 梅 くらうと くらうけう 琴の 曲 あや

くらう 極く 極め くらうと くらうけう くらうと あめ

くらうと 必す くらうと くらうと くらうと くらうと

情と 毒し 忽 雨 難の さふ入 くらうと くらうと

あさう くらう 芽も すくらう 琴の 風

朝良 暮し くらう くらう くらう くらう

くらう くらう くらう くらう くらう くらう

くらう くらう くらう くらう くらう くらう

くらう くらう くらう くらう くらう くらう

枕のそとに

病もろくも様も聖のたよりか
 世もま月もこれ世もまやいんもあれは
 月も月もこのもえもあてりも
 月も月も病もこれとらるる柳
 伊勢の山田のこのもやとらるるも酒をくちくちの
 めもろくもまもろくもあつらふもくちくちと相態とらるるこのも
 柳もまよひもこれとらるるまもろくも直下千尺秋
 色もろくもいんもあつらふもろくも珠もま下も尺
 芳もあつらふも百村の上も酒吹む

山中 芳もよぬれて海と磯と

芳もきりてめでたき世相のたれも
芳も雨の降るもくちくちと相態とらるる

亡母を思ふ

芳も種今や骨もま肉も心
 収骨も肉もこれとらるるも相
 初七日もこれ九品のたきもま
 まもあつらふもまもあつらふも
 まもあつらふもまもあつらふも
 まもあつらふもまもあつらふも

右喪中

萩

風をうら 萩の夕山 日のうすう
 うきやうやうらむる 萩のほの白く
 去る 鱈や水お理く 一萩のく
 夕き 系や 暮とよれり 凡さう
 小比丘尼のおて 控りし萩の
 一萩とらて 向一萩の うきき 萩
 括梗 咲て 何きもふれうきれ
 芒の 考おけり 里あうて 暮る 芒

けくくと 雲れうけや 暮る 夕き
 毛ゆけく 夕折か 夕き 夕折
 夕言と 夕暮 夕き 夕折
 夕折の 紫うき 夕暮 夕折
 あく 夕暮 比の 芒暮る 夕折
 晩の きぬけく 夕暮 夕折
 日も 夕暮 夕折 夕暮 夕折
 村と 夕暮 夕折 夕暮 夕折
 夕暮 夕折 夕暮 夕折
 とふ 夕暮 夕折 夕暮 夕折

上総の園をり所へ山色とる空の門の赤人の
古墳も招きてや、さう程少きとる名の打ひすく
くくく

昔 此葉の水は引くや百選れ
昔 たまてふ君 尋る漏り柳

垣の清く 露 露りぬ 露らまの葉
つゝ 露葉 下戸を 伝き 麻衣

朝 玉くくく や 明き方へ 清くつり

桐乃 ちけ ち ちさこれ ちちぬ
日くくく ちけ ちくくく ちくくく

寒清浄の蘭よりなり半時一睡清寂よ入

秋の蝶 日の暮らら 清くせり

秋の蚊 蚊の死ぬ 日とちり 秋の景

秋の蚊 蚊の死ぬ 日とちり 秋の景

秋の蚊 蚊の死ぬ 日とちり 秋の景

秋の蚊 蚊の死ぬ 日とちり 秋の景

秋の蚊 蚊の死ぬ 日とちり 秋の景

秋の蚊 蚊の死ぬ 日とちり 秋の景

秋の蚊 蚊の死ぬ 日とちり 秋の景

秋の蚊 蚊の死ぬ 日とちり 秋の景

白雲下

常盤塚とて

麻ささやゆきをききききさささ
うらるる 佛の飯や 穂 穂
まきく 霞きは あとはむしりの舞
萩あさしとあさきふさささのさ
霞 やさも 萩よむしりのさ
たささや さ 押うたさのさ
まの者や 美人のぬいき、けり
秋れまさささささささささ

亡母三四忌

ふのむしりまきさささ 喪節のさささ
さささささ いつらさささささ
まのさささ や さささささ
あさささ さと 歌まて 秋のささ
秋のさささ の根さささ 傷ささ
あさささ ささささささささ
ささささ さ ささささささ
黒血川 さささささ 秋の色さささ
秋ささ 二日 霞 木 榎とさささ
秋さささ ささささささ 袖のさ

約集下

よー田山中砂をぢいといふ不八話のてうてうて家つらうてう
村なう芭蕉翁武陵天和の度よあひて替り錫ありりも
此あうてなう

山中めて

山の順とちるむらうてう 翁

川口あう

替ひあう水柱はけくハ脱は矣 全

言ま勢の替時百景とそいり 全

是等の水とていふ百景そいふと替ひをまよう山原へ入て

杜宇 ー 日暮のうつ 袖まはく

是うて紙よかゝるまを叫とむしてとそうー老樹枯れて自言し

杜宇 ー まとむー 其具是すれ

篠の中を物てけーとやうー東海を

梅江のさうまの山家

けふ娘とてうのめあき娘のいまそううたるう東れとては
けつあうまてたをなくあれは織姫さああやよのなん
親いよはあそもある様の翔け玉びーれ玉の紐もそり
たあいたててし只その移らんあーくわハの川は急そなるがむ
なくてかといわうーまゑうてれや、杜風の杜よあひてむらう敷
そのさういーらまきり出ぬあうーハあうてわとそうー大

せんのよきあ〜
 春のよきあ〜
 秋のよきあ〜
 冬のにわか

おこくとおきき 樹のあやみし
 なまなみぬうらたきやおれの秋
 秋の寒の板瓦とさる夜冬は
 海をき面やおきの 濡むしる
 新えてておきき 秋の板瓦
 秋の色 壁中の 枕れよふいとま
 おきのやまや 雲のくけやうら
 秋の山とくろくく 煙うら

きのこ
 雨もやー 松茸山のすくうら
 木とま泥よ 虫うけゆるむ 菌山
 草草や 小法師ゆる 朝ま
 きのこ 灰やききー 山の
 八相
 ハ初や 旗と 森うらよの 忌
 田面の日 毒あくる 寄れ 家増
 神妙よ 古き代あー 角低士
 乱雑 風情 手 猪角力
 きくらハ 名 忌よく 下まひ 乱

角低士
 猪角力

ままひとく死なくゆきり住まはる戸

三日月塚懐古

大寺社の於就流々ハ悉皆頑度佛陀地と成して釋業畝と
たゞ三波三日月の研ハ三の隅ヲ押入りしるさるすたる
なとりと多き多て

あこゝに 既とくちる 三日月

蜀黍の穂 せよたゆげをれく

六祖讚 三日月れ光 三日月 精米

八幡宮千百年法樂

若みこや月よりけさ人ととこやま

月 振の吼くきく月 月 月

月 月 月 月 月 月 月 月

今月の月 雲井の流るんあれ

猫坐 月と 嘉と物たもよ以雲木こる

仲林青月 身や雲流りきけ 雨の序

月の匂ひ ちちるるれ ち砂子

うらむれく 流りもをく 今月の月

大くさハ 美女をうきり 月れま

夕くほも 地よ 是く月のと音外

月満く 美夢れふのすきりき

句集下

十三

折若^二萩垣行く月又^一か
田麻乃^二さしあがり^一なれば月
酒^一の^二味^一も^二さしあがり^一なれば月
人さく^二あさうしてき^一なれば月
杜若^二又さく水の月^一おれ
石山^二やの^一平野^二の^一水^二の^一月^二おれ^一
さ^二と^一の^二角^一よ^二けて^一や^二家^一の^二月^一
北^二と^一の^二情^一せ^二き^一あ^二き^一なれば月
大宮^二や^一月^二を^一ろ^二の^一上^二よ^一
月^二又^一して^二鶴^一の^二山^一の上

雲^二と^一の^二月^一橋^二色^一の^二月^一
月の隈^二十^一国の^二杉^一に^二舟^一を
月^二に^一柱^二を^一お^二け^一と^二又^一あ^二き^一
舟^二を^一二^二舟^一も^二三^一舟^二も^一なれば月
舟^二千里^一目^二を^一あ^二き^一なれば月
水^二は^一月^二を^一さ^二し^一と^二さ^一
地^二を^一人^二と^一い^二ふ^一と^二水^一の^二月^一
良^二舟^一満^二無^一川^二系^一を^二流^一の^二舟^一
月^二は^一酒^二の^一れ^二志^一の^二月^一に^二花^一

曉月鞍上吟

鞍下くや曉の後の夕の月
湖の面をむくうく月とうつ
仲秋をむく山のぼけて

夏山を 霞 雲なり 夕月

口ずさる

あつし吹まれば 夕月をうらむ
夕月入らばも 二つ月のやぶ

大身ハ又ハ夕月を毎と見よも小仲秋を夕月を

思ふ 夕月 夕月 夕月 夕月

おとつこひの月よ射すは夕月をうらむ
人この八九ハ亡念をやありかきとたふしを伴をむく
己のちもあしたの歌のほとあつしや月れ見果をうらむ
夕月や清光の名残をうらむと夕月ハ旅病ハ入る夕月
夕月の影も深ううらむ夕月をうらむ又夕月の影も
夕月をうらむ夕月をうらむ夕月をうらむ夕月をうらむ

夕月のやまに夕月をうらむ夕月をうらむ夕月をうらむ
夕月をうらむ夕月をうらむ夕月をうらむ夕月をうらむ
夕月をうらむ夕月をうらむ夕月をうらむ夕月をうらむ
夕月をうらむ夕月をうらむ夕月をうらむ夕月をうらむ

中天を望む月の光
丸くし 影よ 舞ふ月の影
子始の音や 露と一まの 巨狭城
いかに やりこ つるも 煙のかひさ
中径 月しと 小柳を のけり いをこ丸
林も 山崎の 脊中 手かり 林の雨
林の雨 深まの 所より けり
あきの雨 初弓の 糸よ なく ねぶ
林の雨 ほひも 志し ぬれ扇
林乃る ^{くせい} 嫩き けし けり なる

信濃の道より 甲斐の山 歩をと 引ちえり けを 石田の
ら 歌里へ 年以 文して 志れ 家 婦人 なる 尋ね 甚夜 ころも
あき 八月と 又さや かく けり けり けり けり けり けり
折ふ 土 筆の 水 面 さら かく せし けり けり けり けり

うね ときく 舞り 月れ けり けり
と 有 せ けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり

あけり ときき 市川 けり けり けり けり けり けり けり
新 狂 三 あり けり けり けり けり けり けり けり

白紙

室守澄ておえん

杖の表 三人の籠やこころぬ

甚餘も巨勢大細之の画を頼朝の賜のり〜と手紙の家
名と〜つけを、あよめを度差なり〜河村の神社、甲府の
赤土の〜ま〜山のまよた〜を〜こハ、ひ〜して、我ふ、
田のおぼし神と一神、ま〜は、新旅の〜た〜ぬ、
〜〜程有〜〜、笑〜てぬ、ま。

小堀^{ヲハリ} 田れと〜の 初穂くもあれ

客中 家 かけと〜り 田とさ〜一〜

甲斐の国 市川なる 声あ〜と〜やとれ、おぼし〜

るの、後、川、空を、月、れ、出、つ、り、も、う、す、あ、わ、〜、た、る、よ、い、
〜、つ、つ、の、表、望、高、ま、門、〜、た、も、よ、不、感、あ、る、

あ〜き 和の〜根と厚 ころも

甲斐のふを〜り、つ、せ、き、山、中、〜、や、〜、て

いつの世は〜ありと志の〜ゆ、星と
〜、つ、田、の、月、〜、お、り、ぬ、
いふの、表、号、を、の、げ、と、〜、迷、〜、な、〜、け、は、あ、れ、ぬ、
か、〜、〜、〜、い、〜、も、情、あ、る、や、〜、又、言、な、る、

そ〜れ〜 輪のさ〜ら〜なる

東方天の極も〜や、海の極も〜や、神と〜も、〜ら、れ

るうん仙ととまるとまると

早稲のまきとまきとまきと 月

途中 吟うまきハ浅田に子孫田橋とや

風りや浅田とまきと橋のまひき

橋のまきと移りてまきと又佐の聲

引狼の田ととまきと 彦根が

まきと移りてまきと

川橋のまきととまきと 潮来が

まきととまきと 浅田のまきと

まきととまきと 田尻のまきと

彦根のまきと 浅田のまきと

浅田のまきと 浅田のまきと

まきと移りてまきと

又まきと移りてまきと

まきと移りて

まきと移りて

浅田のまきと

浅田のまきと

浅田のまきと

浅田のまきと

約集

約集

持衣

旅れよや心そくの然くよの
あきのねや神さき 櫛一箇の孔
林乃夜ハ 翠子此 齒牙の言ささ
好のよや 梓おし割る炉のあし
玉むし一の 浴るうひあり ねの杖
あきのねやそろると 眠く君々門
よのめ子々 浴衣おし 梓れる
を 栞 ねのおとよ 閑中 昼し
西 谷の衣う門 ねや 輝る 葺
山 曉と みる人きいて きて 栞

居

栞の 懐ぬけの ね 涼や きて 礎
うつろく 月見つ あれハ きて ぬく 打
世しきハ 上なる人 一さよ きて ぬく
栞おし くる づれ なき人と 暮る ぬ
南小も 初る かし ね 序す なり
と 何 居の 住 誰よ かく ね きて きて し
細く や 言 ねと 在 右一 習之 ね
きそめ ね ね ね ね ね の 居
を 山 や 身と うち 住 ずく ぬ ね くる
礼 厂 と なる や ね の 雲う つ ね

初集

卷九

やうくとまあううう小田の丁
酒も 京らうき山うううやわうう

夕あきう 晴の目うやく晴純し
秋も 木うれ乃う金う 縣の昭うう
うけるうう 出れてうう 晴の尻
犬葉の 舌うれうう 秋の音

煙とよを歌うて
鷹の 昭れうう 羽うや好のうれ

人の上う 煙うきう あきの音
象 深やいのらうれうき 秋れを

藤 下て 滝 ぬうてうん 秋の音
山鳥の さううハ 藤の わうう うも

藤の 聲と それの まうう 秋の 那
こうれてや 晴 漱えうう 藤の 泣万
あううう 村うけうえ 中う 萩の 藤
みけ 猪も 萩う 院う 藤の 聲
藤の 晴音 引 弦う 差れたうう 秋

閑坐に思 ある 夜 玉うう 藤の 晴音も 六うう や
病 藤 や まう 穂うう 明の 音
藤 造うう や 院 聲う 雲 を 列装

列麻 霜の筈山 くるる なる
ゆれ 麻よ 有明の月 ねむく 小

九月朔 吾初て知命の日を是ハとて蓬宮へ 信つ川のほとり
まつ穂ひのつて 是世にまゝ 千巻とぞ かく傳へて 中

とて 又 高ハ 續 玉 始む 一 乃

菊の丸 抱 大津 四部

きよの 葉 な 世の 始 め け け

きく 此 日 ぼん ち ち ち

雷舟、華の 走、葉乃 露
籬 葉 や むの うら ち 一 色

山 風 や 板 戸 な ぶ きて 葉 の 上
庭 きく や 品 一 ち の ま け け け
み くれ 若 葉 折 入 ち ち ち ち
白 菊 と 露 の 泉 と ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
和 高 葉 月 ち ち ち ち ち ち ち ち
新 百 葉 葉 の 文 ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

十三夜の月ハ夫化の橋下ニ控ひての上より娘の四返
いてあまハふとよとらんきと管と縁とふる市村氏の白紙
杜野人許す射るのこ

秋の花 きれうをー 后乃月
后れ月 さいむらう 表れ
月の年波 冥ちあは 荒枕
のられ月 雲よ 鳴る 宿あり

十三夜戸縁の露よやとらて

月よゆは 陸よ 花のむ建をち

古園百里ときて 石歩子のととと二とをの林よあふまも

九月十三夜なりけり

雲 百里と 膏 ありひ 月の 雲

九月十三夜もあふひとなりぬと膏れ 陸無うけのまけハ
好く舎中れともかきなり せよ名かきそ 神也川のまほよ
のとめと福をそよま 古園の感あり

水日 秋 水よ せまうてのられ月

十三夜ハ亡母と七日よあつて

后のせれ月なりハ 母の教も させ
末枯 うれや 西日よ むよ 坊の狗
何ぞれ 末うれをそとれ むと川

葛 人目も字もおとろふ善れ松葉式
葛れ葉や 藤田男の 繩と糸と
表 へまの葉と ねんく 糸と 林の表
紅葉 くれ 紅葉 するよと 又きハらうと
つ 叩 ね 借 怪 一 夕 夕 夕
何とみくも 紅葉と 松と 梅と ね
紅葉 敷や 敷 けて 糸と 糸と 糸と
ね 糸と 人 糸と 糸と 糸と 糸と

夢芝の画撰

木食のりけ入るや 林のいろ

三浦氏娃亭と訪ふ

先づ入るも 柑子れ色と 糸と
途中 藤の葉と 糸と 糸と 糸と
子東三回忌

之ッ葉と 中の七日と 糸と 糸と
表の 窪衣の袖れ 本の葉と
夜もすく 藤れつく 糸と 糸と
むつーや 葉と 糸と 糸と
葉と 葉と 糸と 糸と
路の表と 人 糸と 糸と 糸と

九月の推しむしれ青字むときまし
かゝるて月とねまの止とい行作。

民木ゆいまうけし事ともまひしつるもつ月
かゝるれうまひいとうすく振引くく肩おかしく
境入吹く志わしきよ目うめて

院の森すくきく 九月朔

秋雅 秋暑し 水れ鳴るれ 湖むく

振るれ柄うれり 葉松
くれくつ 宵きあまきのおあ
井路のる 刈菫福あり 此きふ

晴鳴や暮山口のつら 家

暮暮の花まきまきぬ不破の雨
鏡き物のくくをまき 七 瓢

ち雨と面白き 羊 畠

羊 悪く休 美ふなうて 野の亭
晴曇園の ぼけある 老の 子さとや 竹の妻

く結やうまひいづれ 塩

水海夕陽 杖のちと里うち 函 折もあり

鳥 枯や 潮の園に沈むま

老情旅よせりて 暮ひ白川の冥とこゆ

みのおと撃つたれ 善美の
すむ川のほとりかたかたしとあつた山田の山田の
人とも歌くも来れり

日暮り 秋き 秋をうけてかきめ なる
十月も少日あり八日の曉くまらるるかたの月をうけて
さしのほはは秋の名跡も一ほあつたは覚えて

善美 壱屋ふて 山人をえり あきそ
秋の 壱屋 山田のほあつたは覚えて
あきそ 壱屋 夕日の茶よ 小西 陣

あつた 壱屋と 夕の茶を 壱屋ハ
あつた 壱屋と 夕の茶を 壱屋ハ
あつた 壱屋と 夕の茶を 壱屋ハ
あつた 壱屋と 夕の茶を 壱屋ハ
あつた 壱屋と 夕の茶を 壱屋ハ
あつた 壱屋と 夕の茶を 壱屋ハ
あつた 壱屋と 夕の茶を 壱屋ハ
あつた 壱屋と 夕の茶を 壱屋ハ
あつた 壱屋と 夕の茶を 壱屋ハ
あつた 壱屋と 夕の茶を 壱屋ハ

白紙

白紙

そと部

初中や二つ子よ若くそと

湖上吟 庭も又初をれやうを那

をれ日のさへ入るの白ひ

時 鳩の巣れあひるさへしれあ

しれあひるあへるれ日もあへ

漁父画 橋のさるさへしれあ

あへるさへるさへるさへる

一ひれ 烟さへるさへる

しれり果を一ひるのけり

後の音やしれりあとのや

しれり尾根のすへるさへ

つくと杉れり面りしれ

夕川や音のしれり時

さへるさへる山時々のれ

若狭ふり

仲の雲しれりあき好習山

多胡田よは時あさへる

酒屋あき酒家あつ瀬て沈の

船よのけりあき交てしれ

女うむせ甲をうまひかひてのこ

挨拶 多うの 此むとね と葉の 然り

義仲寺蕉翁碑前

あふうて思ひ入事 地云尺
ふれ今いふうはのれ尾花
葉の居 磁床 きぬひと 鏡
まハ——うれ 待とまその 感と伏
障子 立て 糸の 蠅も 有菊の目
霜 葉の 花つむ——の 氣う柳
葉 叶く 雀むうに 鳴相成

ほやくと柳と 葉れ 方 ねぶ
葉 掃る 表を 棒の 白ひれ

途中 霜より 草鞋の つまを 焦く

——と 炭 無と 空物 の 舞く

奥谷寺前 草れと 涼谷の 葉と あつう 夕色

葉枯す 葉れ あり 水の 朝くさう

奥谷 刈地と 葉 誰 節う 霜 ねぶ

葉人の 浮橋 ねぶ 葉乃 園

ねぶ——ろう 噺 流市 葉の 濡 改作

あふくと 葉—— 葉の ぬれ 改作

文字指石 草よくも 生るる 葉のすく

喧や 緑の乳るーも 乃 海

萩の露 齒よ 蒼るる 萩の聲

昔よ 松の乳ー 垂漏るといむ

あ 神 不 泣子 やか 土 園のーも

目 ありー 比 枯木 たり けく 露の月

もー

ゆーき 物うと くれ なが くの

本ーーー ぶい ちう ちう 過 宿

昔よ ちうーく ても ちう ぬ くの

只 一 輪 本ーーー の 風 二 さー

おと けきー ちひ 舟へ け 物 安ー ぬ くの

うー 葉 祿 や 又 風 の 吹 萩 なる

本ーー 此 只 を 垂 まー ぶ ぶ と 何

風 や 本ーー 露 なる 精 の 尻

こ かーー 小 豆 此 葉 為 人 とー

おーーー や 町 人 賣 此ーー 乃 萩

風 の 草 を せ を みる 此 葉 葉 乃

昔 垂 此 十 夜 二 あり あり あり 又 ありー 此 法 院 の け け あり

多 和 の 人 と ありー 此 二 あり 此 二 あり 此 二 ありー 二 あり 此 二 あり

東風新しう唯心細う是て

十乃十相法佛のあききき

小春 海の春一口をきき小春は

美法その編を記しう小春は

得花 わすれふ馬もぬ宿の聲は

得花 祖父う志のあいな

任のいや一もも子れは

美そこよ是れ中なる志も華

茶む 茶のむと免の平れさるは

ちやれふかやそ雀鳴日もあはる

冬夜 ふゆのふやま〜〜ぬ物走ら

冬夜 夜や晴ふけて山にあり

冬月 月の情をさ定めり 櫻木原

月夜と物に相作れむうか

呀きりて核裂〜〜冬のみ月

砂に埋れ戸の小窓やそれ

宅山眺時 空月の類とら〜〜と

空 空根〜〜と春の風あふき

空 空きらの枯叶もよ明〜〜

空 空心〜〜や空の聲は

幽法 山をいづより入ればありし
建能のまきもかき 雲さか
妙義山は信しとさ

ねむひ 雲い 峰に白雲 吹さる
雲天にけしきなくひよりけし白雲をくまきとてて
たよまき ねむひのうねり 雲さか

雲いとも 雲い われさ 雲に
雲い 十分い 雲い 雲と 雲い
雲い 雲い 雲い 雲い 雲い
雲い 雲い 雲い 雲い 雲い

ありやいん 隅田川に 雲い

知多の浦台中亭

夕風の吹さるる 雲い
雲い 雲い 雲い 雲い

雪隠室の雲い

めい 雲い 雲い 雲い 雲い
雲い 雲い 雲い 雲い 雲い
雲い 雲い 雲い 雲い 雲い
雲い 雲い 雲い 雲い 雲い
雲い 雲い 雲い 雲い 雲い
雲い 雲い 雲い 雲い 雲い

冬枯

少るれや寺の寺に人とて
何れもよき松川のそよれ

枯時

雪の如き松のそよれ
雪の如き松のそよれ

雪の如き松のそよれ
雪の如き松のそよれ

雪の如き松のそよれ
雪の如き松のそよれ

雪の如き松のそよれ
雪の如き松のそよれ

枯屋

蒼々として河をのりて
松屋のそよれ

枯尾集

多き松のそよれ
松屋のそよれ

松屋のそよれ
松屋のそよれ

松屋のそよれ
松屋のそよれ

落葉

松屋のそよれ
松屋のそよれ

松屋のそよれ
松屋のそよれ

松屋のそよれ
松屋のそよれ

松屋のそよれ
松屋のそよれ

松屋のそよれ
松屋のそよれ

松屋のそよれ
松屋のそよれ

松屋のそよれ
松屋のそよれ

松屋のそよれ
松屋のそよれ

を岩江上と臨とりの多相の漆と云くそ

夕園此より風の傳らるる
橋売や下流の歯多き花崗

淡らるる君此中より形りし
風もやく二つよりれくむらるる
らるれしてや二流より鳴らるる
月も又入る君も遠くなく
眺とまれりやむらるる
園のりふの色もぬらるる
あまやまにるるとらるる

水鳥此巴なうて花ひ
あまのまり経や流の去
人ととらるる君とあれ
去のひねより相もあらし歌を駕
うらると君に照さるるやそれき
眺の山と紙くまらるる
らひつらう浮出きてえてさぬ
雨もうられも吹流のうきさ
浮鴨や鞍男と射者

出羽のふり

鳥

鳥

彎 あゝ彎や山と世相の朝曇り

彎 繼ぐ宿の毛敷をみろ

たのふまゝむれしく月と夜粧り

橋 夕陽の影の松風 葉ふかり

葉 橋に流るる水とたゞの

室也の夜またくらきつ或は増雲の揺るうれい

空かたへ

かゝ蛙やぬま木の溜炭のそれ

く蛙 むらげけととまうて 象皮肉が

何掬 今をふき身をとて 飯のいゝか

身とまゝに 沈めくゝ何掬の飯

生海氣 生海氣干何言まゝ 晴の二日風

昏冥こゝろて蒼海の浪のうれあるハ妙きあらうて

終に危丁とつろをぬれと懐す

くつきりくつきり 冴ふなすこ

細代 橋の影の中 細代のかとうれ

まじ世の片端 麦と薪をぬ

を田刈 夕暮れ人のむらり

炭のまや 聖の烟乃 樟原

きり此りと進入ぬ あゝら

白葉下

三十五

坂鳥の物とくく 管の那

納豆叩 研や四万八十寺

風さえてと翔くも又山をし

神樂 そ所をく 報うつそや里くく

法叩 ふくくく おのま 二代の神をき

於揚のたよ、まればちら叩

ちらたき今とむくく此思ひゆや

愚く帰る 嘆くもや法なき

空麻 けのくくと鳴く 空の 歌を 麻

人とくくならく 空にく

きのくくく 木下もきん ゆきの糸

楳 晴や 楳 境 是れ 山にるく

又 けく此火や 嘆くけや 月おけし

旅子 危殆くく 楳 あく

画後 親くく此うき世や けく の歌

寒菊 空 菊の 蕾 実の ぼきく

くきくや 文よ 花をよ くれの 好

水仙 多 仙や うき世 小 珠 玉 すすり

雪 落雪や 雪に 雪 是れ けみ

雪まじり 雪の 尻 尻 ちく けし

雪まじり 雪の 尻 尻 ちく けし

ゆき雪戸木のれさ〜き卯子〜
青雪や大雪よ雪れ雪のあり
雪さくゆる雪吹と鳥のれ
あやれくも雪降る小雪ふ
雪と出〜雪すハ表雪雪の人
柳折て雪と鳥飛れ〜酒
雪の壳叩蹴や〜乃雪
雪とやとて折る雪れ〜が
猛突の極よ言れ除雪れ
雪の人母や雪ふ子や青は

日うれび〜て又雪の降初れ
雪りや又み〜る雪の人
不破の雪さる〜雪の色さる
雪の傍ゆり来る雪よ物む
雪雪やおれ吹け〜小れ城
月とれ〜雪の降とも又雪れ
雪ハ降降〜ハ雪又〜大雪も
雪の紙よ小雪竹〜市雪

金剛寺園下小老樹あり

月雪とこえ〜楊の蝶う那

佛魔窓馬あつ十七回の句とをきく

佛も魔も 院々言此十七年

人の書とまひたつ

くさくさや 月言 泪 汗 目 衣

言此涼くく言言月言か言き言うあつて言も言人言

か言は言悦言者言とくく言今言伴言の言事言を言日言木言ひ言ん言

言ん言ハ言け言も言や言ん言ん言山言野言を言た言の言う言て言午言言言言言言言言

つ言言一言教言を言ぬ言風言の言入言破言言ハ言荒言を言とく言て言言言言言

人言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

老く壯なるそのハ白髪のみさけけか言ま言のハ中言言言言言
なり老く本言字言のサ言餘言を言け言く言後言を言言言言言言言言言言

雪中の梅あり 糸よ 志のよ 字

霰 あつは降 新ハ 貴う 正本 了

雪の情 月 ぬる言 あれ 小 粒

玉 霰 如 言 言 け け 粒

新 さや 枯 藤 言 戸 言 言 玉 霰

た言下言あ言れ言 言言言 沈言言 言 言 け け け

言言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言

滝 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言

玉霞 凝治々 飛火よ 交り々
氷 櫓乃 何と ちうう 下 岸 氷

さうおーや 壺文ま 書うん 氷

大石の所まよぬの骨とさうめまうて

氷 なみと 山 齒小しむち山おろし

空衣 袂 床の着も 挽戸ぬ 空衣 柳

師毛 さくくと 粟 搦 阿毛 月夜 小

百姓の板戸 履り 志守 ね

旅行 や一とまは た 茶一とい

落る 歯のけしき 季の暗きう那

ある日嵐月一瓶のふと換来しと術して

予の病と構て園中よ秋枝の茶採く起州と履くをを白ひ

いふうく露のきうめけとうらみさうり此のけいけい物のあつ

さもまーくわさゆらん此すれといさう茶ともうらふむとさうよ

つげくもおさひひらぬ万こや輜川の画图とむきて病とやせ

たるもまよさう事さうし 先く仙の叱くは後世さうさうく玉乃

巻もあめりしと杜若の早色秋もなく鏡まなうぬ色しうて

ねんそむるさけく一室まのままよくさきとも花一箇小

四葉とあめさう依くまうりおも

鈴延枕上盧生夢 襟舞机在在子菟

田とくまう街をさつと天下老和尙の誕生之縁とく
痛き事しそく又彼街をさうて苦痛する十餘の苦
なくうつとれく今と昔のほろをれなきよりあまのれ
まのよてはつとる露のほろのめ

きあきううき世のそとなく
際と昔と起るらむつーや

感慨懺愧

あゝゝゝ若て心ーや 幸 忘
木こひ出して子幸なりき幸わすき
貧初老 ーと忘き々よ白髪の 仲 入

かやらふやと昔志のーれ忘もあゝ

遙見羞若士半

年 忘き 不二とくまく 坐敷が
草の昔 霞 ーれの心ー
ひ色く 風 大若と 吟ん ー那
赤ーれく 鏡の中 かもろり

拾遺

佛仙 都の冬集序

北海より一仙あり夢にまげに有聲の音をあはしし味も無取の
身と思ふ時より言はれずして夢をさう又夢をみらく市
中の優遊よまゝりて化の風録と甘しけりもあゝ入て宏く
系系よとまゝりて熱烟云を引くけついでついで花物さう
るよ一冊子と残さうりて周筆とくくす贅す

高里歌

おま乃達の ねと縁く けいふよりも 君の所
きく耳おこり 志といふも

おちとり ね子も ねも ちんちん

ちんちんや みやこも

きのよ雪水よ杖と曳く 榊條よ身とちんちん

まよハ杖と芝草よ曳き 弘誓の棒ちんちん

おまの達乃 ねと縁く むねしき書と

ま川のうね

を護院の杜の空葉よハ 書きあやまらうと

新波にの芦の浮葉よハ 友鳥よとまらうと

まらうとやうと 伊丹のいぢらうと

いぢらうとまらうと くれのるハ増えと

心云のゆくひて 晴ぬも海なるも

なちとくゆきとく あぢきはなや 船もさなや

右哭夜半亭几董

藤川の東涯よかしの梅ありを嶽とまつく山をまき経し
瀧に水とまきと経とそし 孤村の烟を征あるの遊とく
尾城のこくう 汐境の渡舟する主人おのつゝ画の中よあそ
世よ友とくしんをすい水上の月よ清無あそしと酒披る
僧あそ八住者と思よも修あり糸あり竹そ三舟の才待り
おろしとわとゆめまあひ一葉とくく千里に遊せとん
あしとくそれとくそのむらとくくちとくく雨をさきくふ

川つと這ひのほきハさとまて生嶽よりつて

後エー くと き山も 百の月

世集集小序

煙客と率て十洲に遊心とおりの八湖東日野の梨文ぬ
なり頗披煙弄月の土老よ清心と吐て怪とん此春野花
とゆめかすのらとくしんをすい水上の月よ清無あそしと酒披る
友生毛伐洗髓ととてけきこととよ其祥噤とくくつて吟
雀穿雲れをあり余款あやなるぶあやとあやとして一を
あそあそくしんをすい水上の月よ清無あそしと酒披る
必後ちんや於一紀よあそくしんをすい水上の月よ清無あそしと酒披る

さかしく書しはるうとすめて世継書とよけむ木の葉
曉堂の雀穿雲の考と合きく龍門の南窓よかく云

今にむし先師和下一冊子ありまはれおまれ
たる自縁を著し我まの人もおまきにし
おろし紙ほききぬうら見守れはききなる
事しとうふあれうらに本をぬきしとむれれ
免し給うししを師遷化の好程なく三條集
何れと見なほはとせり利らゆれぬあれく
ぬ徳も紙つゝあま事し三よらま師のまきと
中人をうらにせ徳と正しとらぬしめむと此の
二書と著し但なく冊子に出るはおほくハ再ん

古今且好まあるに落敷所の句も又解するに
こゝよりいふ所撰しつゝこれと揃ひきり候と
指すゝ再い審然とて予孫全残の事と

その日所央しつゝ

文化六年

己巳仲秋日



書林

名古屋本町一丁目

風月堂孫助

同 杉之町

吉田屋惣吉

同 本町十丁目

松屋善兵衛

湯島切通町下

須原屋文五郎

江戸書林

